
平成23年度 独立行政法人 福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

西成区に住む単身高齢者の
健康生活支援事業

平成24年3月

特定非営利活動法人
HEALTH SUPPORT OSAKA

II 健康相談会及び見守り支援事業

地域のホームレス者や元日雇い労働者に対して、健康と生活の状況を把握する見守り支援活動を行った。これは介護保険や医療保険の訪問介護・看護に結びついていない人で、閉じこもり、抑うつ、アルコール問題などを抱えている人々への支援である。生活・健康面での問題を明らかにし、必要な支援につなげる活動を下記のとおり実施した。

見守り支援事業(訪問・拠点)相談実績

8月	1日	8日	11日	26日	29日		
	訪問	訪問	訪問	訪問	訪問		
9月	5日	12日	13日	21日	26日	28日	
	訪問	訪問	訪問	訪問	訪問	訪問	
10月	3日	4日	14日	17日	18日	21日	24日
	訪問	7人 拠点訪問	訪問	訪問	10人 拠点	訪問	訪問
11月	8日	11日	14日	25日	28日	30日	
	訪問	訪問	訪問	訪問	訪問	8人 拠点	
12月	6日	12日	13日	14日	16日	26日	28日
	訪問	訪問	訪問	10人 訪問	訪問	訪問	9人 拠点
1月	11日	16日	17日	20日	23日	25日	30日
	7人 拠点	訪問	訪問	訪問	訪問	9人 拠点	訪問
2月	6日	8日	10日	21日	22日	29日	
	訪問	8人 拠点	訪問	訪問	9人 拠点	訪問	
3月	2日	5日	7日	9日	12日	14日	
	訪問	訪問	8人 拠点	訪問	訪問	9人 拠点	
3月	16日	19日	21日	23日	26日	28日	
	訪問	訪問	訪問	訪問	訪問	訪問	

訪問による見守り支援活動

現在西成あいりん地域では様々な支援者によって路上や空き地で寝泊まりしている人たちへの、見守り活動が実施されている。居宅生活に移行する相談支援、生活できる基盤整備として居宅さがし、生活保護の受給や健康相談、安否確認などが行われている。

健康相談に於いては、要医療者への受診支援や、継続医療の支援を行っているが、未受診や治療放置・治療拒否する人はまだ多く、その対応が充分ではないという課題がある。このためNPO HESOでは、看護師による訪問支援活動を2010年8月から行うこととした。主な活動内容は受診勧奨である。当事者には受診につながらない様々な理由があるので、まずそれを聞くことから開始した。

受診に繋げるためには本人が「健康を取り戻したい」と気付くように、時間を掛けて充分話しを聞きながら見守り続けて支援する。支援者のメッセージを伝える前に、時間はかかるが本人が納得する

まで充分聞くと治療に繋がる事例もあった。当事者への訪問は、平均週に2〜3回で月8〜10回程度となる。当事者の状況に合わせて訪問頻度は計画し、必要な場合は毎日訪問も可能とした。現在、新規・継続訪問あわせて20名近い訪問を行っており、これまでの訪問終了者を含めると30数名になる。

以下は見守り訪問で好転した事例である。

1) 61歳 男性、公園でテント生活6年、血圧高値、体重減少、体力減退が著しく、居宅保護を勧奨するが、「まだいける」と言いづけて、出会いから1年後やっと生活保護を受給することとなった。

初回訪問の状況

文化住宅の1階で4畳半、3畳の台所とトイレがある。銭湯利用。室内では縦の空間利用もあり、きちんと整理整頓されている。(一般にホームレス体験者は床に物を並べる平面利用者が多い。)訪問時は穏やかな表情で迎えてくれる。そして静かに話してくれた。「テントで暮らしているときは、空き缶収集やほかの仕事で何とか自分の力で生きてきた。食べるものが何もないときは食べなくても、明日頑張ろうと思っていた。今は食べ物や季節の変化の心配もなく生かされて感謝しているが生きる希望が持てない。税金のお世話になっているのは、すまないことです。これ以上迷惑かけられないから、病院には行きたくない」と言う。血圧値180/120 食事内容は、塩分が濃いそうなスーパーでの安い方の弁当を1日2食摂っている。初日は本人の思いをしっかり聴かせてもらうのみとした。

2回目以降の訪問状況

受診拒否が続くが、傾聴を続ける。

「故郷を捨てて30年近くなる、娘のことは何かある毎に思い出す、体が弱かったから心配だ、生きていてほしい、気になるけど今更親とは言えない、自分が悪い。自分のようなのが生きていてもなあ」と自分の過去の出来事に自責の念を抱いていた。生きてきた過去に向き合うことに不安を持ち、「自分なんか」と自尊心の低下を招き「受診拒否」になっていたと思われた。またテント暮らしが長く地域の中での生活そのものにも自信が持てず自分の考えで行動ができない状況だった。

ただひたすら話を聞き4回目の時血圧測定後、自分から「血圧、まだ高いですか？一度病院にいきますわ」と初めて意志決定を表示した。

その後も週1回程度の訪問を継続した。内服薬の継続の必要性や食事内容の話も出来るようになった。歯がほとんどなかったので歯科受診勧奨で義歯も作った。しかし地域の中での人間関係の広がりはなく、他者との交流もなかった。週1回の訪問の「見守り支援者」との会話だけが唯一の交流だった。

継続訪問して1年後に生活保護ケースワーカーから就労指導があった。義歯も入り、血圧も安定し本人も強い就労意欲をしめした。シルバー人材センターからの仕事で、週4日・1日5時間、草取りなどの公園の整備だった。日増しに活気が出てきて訪問時には目を輝かせながら仕事のこと、仲間のことなど話してくれ意欲的になった。収入の一部を「ホームレスの人に」と寄付もしていた。

4か月が過ぎ、仕事を継続するという生活習慣にも慣れ、人間関係も広がり安定されたと安心していましたが、シルバー人材センターが他の業者との「入札」に負けたため突然失業となった。

短い期間であったが、仕事を通して仲間と語り人間関係の輪を広げたことは、自分自身を取り戻す機会であった。その後自らの判断でN県から戸籍と住所を移したのは、この地域に住む見通しがもて

たからではないかと推測する。最近は「あそこの高齢者が困っているので訪問してあげて」と、他者への気遣いまで生まれている。自分の大きな人生課題という「故郷に行く」ことはまだ実現できていないが、本人自らが過去と向き合い、自ら行動変容できることを信じて見守り支援を続けている。

2) 62 歳 男性、公園での野宿歴 5 年。3 年前に心筋梗塞で意識不明になり救急搬送される。ステント挿入後に意識が戻った。退院と同時に、生活保護受給となった。集合住宅の 1 階で 6 畳一間とトイレ、風呂が付いている。病気に対する不安があり、医師を信頼できず複数の病院を転々（いわゆる Dr. ショッピング）としていた。

初回訪問の状況

室内は、布団が敷きっぱなしで、ごみが散らばっているなかで生活している。本人も気にして「汚くてごめんな」と言う。不安な表情で、入院して治療を受けた経緯を説明してくれた。思いもよらない病気にかかり心臓に管を入れた。「一人部屋で死んでも誰にも知られずに腐っていく自分を想像すると怖い」と何度も言う。これから週に 1 回は必ず訪問すること、携帯番号をメモで渡し「いつでも電話をしても良いよ」と伝えた。

2 回目以降の訪問の状況

訪問の毎に「死ぬかもしれない、死んでも発見されずに腐っていくのかなあー、人間いつかは死ぬけど、誰にも知られずにいるのは怖い」と暗い表情で話す。病気のこと、死への不安のことを繰り返えし訴えた。あまりにも重い課題であり否定も肯定もせず、共感的に話を聞き続けた。また、主治医を決めて治療継続することの方が病状は安定することを伝えた。その後は病院を転々することはなくなり主治医との関係も安定した。

訪問して 7 か月頃から、「生きてるよ!」と笑顔で冗談を言う余裕をみせてくれるようになってきた。この変化は、週に 1 回は必ず訪問してくれる、しんどいときは電話で聞いてくれる人がいるという安心感により不安が解消されてきたと思われた。

9 か月目頃からポツリぽつりと自分のことを話してくれた。両親や兄弟のこと、「自分は出来の悪い子だった。」「大阪に出てきて日雇いで働いていた。」「入った金で飯を食い、ドヤに泊まり、残った金でパチンコばかりしていた。」「あの頃は国の政策が悪いと文句ばかり言っていたが、今は生活保護を貰い税金で生かされている。国に悪いと思う。」としんみり言う。話を聞き続けた。

春には裏の一畳くらいの庭にトマトやウコンなどの植物を植えていた。自然を楽しむ心のゆとりが感じられた。この頃より死への不安の言葉がなくなった。「最近死ぬことを考えんようになっなあー」と言う。心にゆとりが生まれたので訪問回数を 2 週間に 1 回程度に減らす提案をした。

訪問開始 1 年 6 カ月が経過

訪問すると、室内にベットがあり、床には新しい敷物が敷かれていた。ベットは知り合いから譲り受けたという。部屋全体が整理整頓されていた。「いつまでもくよくよしててもあかん思うてなあー、なんとかやっていけると思うようになった」と眩しいぐらいの笑顔があった。「ひとりではない、信頼できる誰かが居る」という安心感が生きる希望を取り戻す機会になったのではないかと思います。支援者の関係から知り合い関係まで拡がり、生きる意欲が強く出てきているように思った。今後も聞く・聴くことに努め、共にあり続けたい。